

Title	パルマコスの儀礼における石打ちについて
Author(s)	平山, 晃司
Citation	西洋古典学研究. 2001, 49, p. 86-97
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24873
rights	日本西洋古典学会
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

パルマコスの儀礼における石打ちについて

平 山 晃 司

I

共同体内に不知不識のうちに生ずる一切の罪や穢れを特定の間人や動物などに負わせ、これを外部に放逐したり殺したりすることによって祓い浄めようとする儀礼は、旧約聖書『レビ記』の「アザゼルの雄山羊」から日本の流し雛の風習に至るまで、古今東西を問わず広く見られるものである。

古代ギリシアのいくつかの都市では、毎年決まった時期に、また疫病や飢饉、旱魃などの災厄に見舞われた際に、身分卑賤で貧しく醜い者の中から選ばれた1人または2人の人間をスケープゴートとして用いる浄化儀礼が行われていた。これらの人間は「パルマコス」*φαρμακός*⁽¹⁾、あるいは、祓い捨てられるべき存在ゆえか、「屑」*κάθαρμα* と呼ばれていた。

この儀礼の詳細、特にパルマコスが最終的にどのように処理されたかについての同時代の証言は極めて乏しく、古代末期から中世にかけての古注や事典の記事に多くを頼らざるを得ないのが現状である。しかも、それらの内容には著しい食い違いが見られ、パルマコスが殺害されたと伝えているものもあれば、追放されたことを示唆するものもある。そしてこの不一致が、研究者らの間にパルマコス殺害説と非殺害説の対立を生むこととなった⁽²⁾。

だが、パルマコスは殺害されたのか、それとも追放されただけで殺されはしなかったのかという議論に決着をつけることに、一体どれほどの意味があるだろうか。死んでこの世からいなくなるにせよ、国境の外へ追い払われるにせよ、パルマコスが共同体から完全に排除されさえすれば、この儀礼の目的は果たされるのである⁽³⁾。従来の研究者は、とかくこの「殺害か追放か」という問題意識に囚われがちであったが、これを敢えて捨てて、何か別の視点からこの儀礼を眺め直してみることも必要なのではないか。

本稿はパルマコスの儀礼に関する古代の証言のいくつかが石打ちに言及しているという事実スポットを当て、この儀礼において石打ちが果たした役割を明確にするとともに、「パルマコスが(石打ちによって)殺された」とする伝えの由って来るところは何かを考えようとするものである。

II

パルマコスの儀礼に関する最古の証言者は、前6世紀の詩人ヒッポナクスである⁽⁴⁾。直接これに言及しているいくつかの断片から知られるのは、この儀礼が「都市を浄めること」(fr. 5)を目的としてタルゲリア祭の期間中に行われるものであること(fr. 104. 47-9)、その際パルマコスは一チジクと大麦パンとチーズをあてがわれ(fr. 8)、一チジクの枝や海葱で打たれる(fr. 5, 6, 9, 10, 92. 3-4)⁽⁵⁾ということである。儀式の終わりにパルマコスを受け取る運命については、詩人の口から直接語られることはない。

12世紀ビザンツの学者ツェツェスは、ヒッポナクスの断片5-10の引用を含む自著『キリアデス』⁽⁶⁾の一節で、パルマコスとそれをういた儀礼とをいづれも *θυσία* と称し(5. 731, 733, 759)、パルマコスは焼き殺され、その灰は海に撒かれたと述べている(737-8)。ツェツェスは別の所でも同趣旨のコメントを残しているが⁽⁷⁾、それを裏付ける証拠はどこにも見当たらず、そもそもパルマコスが焼き殺されたと述べている者は彼を除いて外にいない。このことについて Hughes は、ツェツェスは *ὀξυθύμια* ないし *καθάρματα* と呼ばれるある種の汚穢・廃棄物の処理の方法をパルマコスのそれと混同したのであり、かかる誤解が生じたのは *φαρμακός* と *κάθαρμα* がしばしば同義語として用いられたことによると論じている⁽⁸⁾。我々もこれに従いたい。

だが、パルマコスは殺害されたと伝える証言はツェツェス以外にも少なからず存在し、しかもそのうちのいくつかは「石打ちによって殺された」と明言している。これにインスパイアされた一部の研究者⁽⁹⁾は、ヒッポナクスの詩の中にその証拠を見出そうとし、特に次の2つの断片に注目した。

- (1) *Μοῦσά μοι Εὐρυμεδοντιάδεα τὴν ποντοχάρυβδιν,
τὴν ἐν γαστρὶ μάχαιραν, ὃς ἐσθίει οὐ κατὰ κόσμον,
ἔννεφ', ὅπως ψηφίδι < > κακὸν οἶτον ὀλείται
βουλῇ δημοσίῃ παρὰ θῆν' ἀλὸς ἀτρυγέτοιο* (fr. 128)

Hughes は3行目の *ψηφίδι* をパルマコスの断片⁽¹⁰⁾からの類推によって「投票用の石」の意味に解し、lacuna に *κακῆ* を補って「有罪の票によって(死刑に処せられる)」と読む。そして問題の語が単数形であることを取り上げて、小石1つでは人を死に至らしめることはできないと付け加えている⁽¹¹⁾。しかし、必ずしもこのように解する必要はない。*ψηφίς* は単数形で集合名詞としての「小石」を意味しうるし⁽¹²⁾、さもなくば Hughes 自身消極的にその可能性を認めて

いるように、この単数形をややオーバーな緩叙法と見なしてもよい。いずれにせよ、3-4行が石打ちに言及していると解することは十分可能なのである。したがって我々としては、lacunaに *κακός* を補い、「下劣な男が石打ちによって悲惨な死を遂げる」と読む案を採りたい。しかしながら、これがパルマコスの殺害を暗示していると断ずることはできない。

伝プルタルコス『音楽について』の一節で、作者は「イチジクの曲」と呼ばれる楽曲(*νόμος καλούμενος Κραδίας*)に言及し、「ヒッポナクスはミムネルモスがこの曲を笛で演奏したと言っている」と記している([Plut.] *De musica* 8, 1133f-1134a)。一方、ヘシュキオス(s. v. *κραδίας νόμος*)によれば、この曲は「パルマコスが送り出される時に」(*τοῖς ἐκπεμπομένοις φαρμακοῖς*)笛で伴奏されるものだという。これらはいずれもヒッポナクスの同じ詩句を典拠としていると考えられているが(fr. 153 West)、そうだとすれば、少なくともヒッポナクスが見聞した限りでは、パルマコスは市外へと追放されたのであって、殺されはしなかったということになる。これにより、断片 128 がパルマコスの儀礼に暗に言及したものであるとの解釈は否定される。

(2) *ἐκέλευε βάλλειν καὶ λεύειν Ἴππώνακτα* (fr. 37)

この断片からは、詩人の仇敵(ブーパロスか誰か)が人々をけしかけて、彼に石を投げつけさせようとしたということ以上の意味を読み取るのは困難であるように思われる。ここでパルマコスの儀礼への言及が暗になされているとする考えは、パルマコスに対して石打ちが行われたという伝えの存在を前提とした憶測にすぎない。しかし、その可能性が完全に否定されなければならない理由もない。

以上を要するに、ヒッポナクスが生きた時代のイオニアでは、パルマコスの追放に際して石打ちが行われた可能性が無きにしもあらずである⁽¹³⁾。

III

ヒッポナクスの断片からは、その僅かな可能性が辛うじて見出されたにすぎなかったが、パルマコスの儀礼において石打ちが行われたと明示的に述べている証言が、少数ながら存在する。それらの具体的な分析に入る前にまず、そもそもなぜ石打ちがパルマコスの儀礼において主要な役割を果たし得たのかを、ここで明確にしておきたい。

石打ちの特質として第一に挙げられるのは、その集団的制裁としての側面である。共同体の全成員が罪人の処刑に参加することによって、その責任が全員

に均等に分散されるとともに、人ひとりの命を奪うことに不可避的に伴う罪障感も、全員で分け合うことによって軽減されるという仕組みである⁽¹⁴⁾。共同体全体の利益を著しく損なう行為、あるいは成員一般の道徳的・倫理的感情を傷つけるような行為が専ら石打ちによって罰せられたが、そのような行為の最たるものは、戦時中における背信行為である。オデュッセウスの奸計によってプリアモスとの内通の嫌疑をかけられたパラメデス⁽¹⁵⁾を嚆矢として、現実の歴史においても何人もの売国奴が同朋による憎悪の礫の犠牲となっている⁽¹⁶⁾。

石打ちにはしかし、もう1つの重要な側面がある。

古代ギリシア人は、ある集団の内部で何者かが瀆神行為に及んだ場合、その集団全体に神罰としての災厄がもたらされると信じていた。これは別の言い方をすれば、1人の人間の犯した罪が、その集団の全成員の負うところとなるということである⁽¹⁷⁾。そして、そのように共同体全体を危険に晒す神聖冒瀆の罪は、ほかならぬ石打ちによって罰せられたのである。

例えば、ヘクトルはパリスに対して、お前の罪は石打ちに値するという意味のことを言うが⁽¹⁸⁾、パリスの犯した罪とは、スパルタのメネラオスの許を訪れた際、客人として歓待を受けておきながら、彼の妻ヘレネを誘惑してトロイアへ連れ去ったことであり、これはゼウス・クセイニオスに対する冒瀆にほかならない。この結果引き起こされた戦争、そしてトロイアの滅亡は、パリスの行いによってトロイアの全人民に負わせられた罪に対する神罰である⁽¹⁹⁾。また、プロクロス『イリオスの陥落』梗概によれば、オイレウスの子アイアスはトロイア落城の際、カッサンドラに凌辱を加えようとして、アテナの神像にしがみついて抵抗する彼女を無理やり引き離そうとするが、同時に神像を台座から引き抜いてしまう。これに憤慨したアカイア勢はアイアスを石打ちの刑に処することを決議するが、彼はアテナの祭壇に逃れて辛くも難を免れる⁽²⁰⁾。この結果、帰国の途上にあつたアカイア軍の船団を怒れる女神の起こした嵐が襲い、多くの船が遭難する⁽²¹⁾。

これらの事例が示すように、瀆神の罪を犯した者を石打ちによって罰するということは、共同体全体に負わせられた罪の各成員の負担分を、罪人1人の身に負わせる形で取り除くことを意味したのである。

一方、次のエピソードもパリスおよびアイアスのそれと同様、1人の人間の瀆神行為の結果、その人間の属する集団全体が災厄(神罰)を蒙るという構造を備えている。娘クリュセイスをアカイア軍に捕らえられた祭司クリュセスは、アポロンの神聖の標である羊毛の房飾りを先端に結び付けた黄金の笏杖を手に、

莫大な身の代を携えてアカイア軍の陣営を訪れ、「ゼウスの御子、遠矢を射るアポロンを畏れ敬って」娘を返して欲しいと嘆願する。しかし、クリュセイスを自分の分け前として得ていたアガ멤ノンには、笏杖も神の標もお前にとって何の役にも立たぬだろうと言いついて彼を追い払ってしまう。この冒瀆に怒ったアポロンはアカイア軍の陣中に悪疫を撒き散らし、そのため多くの兵士が斃れる⁽²²⁾。

やがてアキレウスの発議により全軍の集会が開かれ、その場で予言者カルカスがアポロンの神意を説き明かしたため、アガ멤ノンはやむなくクリュセイスの返還を決意する(もしアガ멤ノンが彼女を手放すことをなおも拒否し続けたとしたら、彼は石打ちに遭っていたであろう⁽²³⁾)。そして、クリュセイスを乗せた船を父親の許へ送り届けた後、アガ멤ノンはアカイア軍の将兵らに命じて禊を行わせるのである⁽²⁴⁾。このことは、1人の人間の瀆神行為のために共同体全体の負うところとなる罪が、その行為によって発生し、共同体全体を汚染する穢れとしても意識されていたことを示している。したがって、瀆神の罪を犯した者を石打ちによって罰するということは、共同体全体に伝染し、各成員の身に及んだ穢れを、罪人1人に転嫁する形で祓い浄めることをも意味していたわけである。

このように、石打ちは贖罪／浄化儀礼としての機能をも有していたのであり、ゆえにこそパルマコスの儀礼において中心的な役割を果たし得たのであった。儀式に参加する市民らは、パルマコスに石を投げつけることによって罪穢れをその一身に負わせ、もって自らの身に災いが降りかかるのを防いだのである。

ここで注意しておきたいのは、贖罪／浄化儀礼としての石打ちは必ずしも標的の殺害を目的としなかったということである⁽²⁵⁾。前章でヒッポナークスの断片に基づいて想定したイオニアにおけるパルマコスの儀礼の形態が、このことを示している。また、プラトンは『法律』の中で、親族殺しの犯人は、これを死刑にした上で、すべての役人たちが全ポリスを代表して石をその遺体の頭に投げつけ⁽²⁶⁾、かくして「国家全体の穢れを浄めなければならない」と規定している(873b)。

それによってパルマコスが殺害されたにせよ、その追放に際して儀式的に行われたにせよ、共同体からの罪穢れの祓い浄めを目的とするこの儀礼において、石打ちは不可欠の要素であったと考えてしかるべきである。

IV

パルマコスの儀礼において石打ちが行われたことを示す最初の証言は、オウィディウス『イビス』の詩句の中に見出される。

Aut te devoveat certis Abdera diebus

saxaque devotum grandine plura petant. (Ov. *Ib.* 467-8)

この箇所への古注(Schol. CFD ad Ov. *Ib.* 467)は典拠としてカリマコスの名を挙げ、アブデラでは毎年都市全体を浄めるに際して、市民のうちの1人を石打ちにより殺害した(lapidibus occidebant)と記している。一方、カリマコスの断片 "Ενθ', "Αβδηρ', οὐ νῦν [...] λειω φαρμακὸν ἀγινεῖ(fr. 90 Pfeiffer)に対する「解説」(*Dieg.* II. 29-40 ad loc.)によれば、同市では都市を浄めるにあたってパルマコスとなる人物が購入される。彼は十分な食事を与えられた後市外へ連れ出され、市壁の周囲を引き廻された挙句、石を投げつけられて国境の外へ追い払われる(λιθοβολεῖται, ἕως ἐξελασθῆ τῶν ὀρίων)。

これら2つの証言の間の食い違い、すなわち一方はパルマコスが殺されたと伝えているのに対して、もう一方は追放されたと述べていることをどのように捉えるべきであろうか。Hughesの言うように⁽²⁷⁾『イビス』の古注家が、儀式の締め括りとして行われる石打ちの目的(パルマコスの追放)を誤解したのだろうか。しかし、パルマコスの殺害あるいは追放そのものが石打ちの目的なのではない。それらは儀礼の形態にすぎないのであって、どちらの場合も罪穢れの祓い浄めという「目的」に変わりはないということ忘れてはならない。

マッサリアにおける浄化儀礼に関する2つの証言の内容にも、これと同様の齟齬が見られる。セルウィウスはペトロニウスを典拠として挙げ、次のように述べている。同市では疫病に見舞われる度毎に、貧者の1人が我とわが身を差し出し、丸1年の間公費で賄われた清浄な食事を与えられる。しかる後に彼は木の枝と聖なる衣服で飾り立てられ、「町全体の災いがこの者の身に降りかからんことを」という呪いの言葉を浴びせられながら市内全域を引き廻され、やがて追放される(*Serv. Verg. Aen.* 3. 57=*Petron.* fr. 1)。一方、ラクタンティウス・プラキドゥスの名の下に伝わるスタティウス『テーバイス』の古注の記述によれば、褒美に釣られて自らを売った貧者は、丸1年間公費で養われた後、特定の神聖な日に市内全域を引き廻されてから市外へ連れ出され、国境の外へ追われた挙句、民衆の手で石打ちによって殺されたという(*Lact. Plac. Comm. in Stat. Theb.* 10. 793)。

これらの証言には、次の2つの点で不一致が見られる。第一に、セルウィウスは市民が疫病に苛まれる度毎に(*quotiens pestilentia laborant*)この儀礼が行われたと述べているのに対し、「ラクタンティウス」の *certo et sollemni die* という文言からは、これが年中行事であったことが窺われる。第二に、前者の伝えるところでは、スケープゴート役を買って出た貧者は儀式の最後に追放された(*proiciebatur*)だけであるのに対し、後者によれば彼は国境外へ追放の上、石打ちによって殺された(*saxis occidebatur*)という。第一の点に関しては「ラクタンティウス」の方が信憑性が高い。というのは、疫病が現に猛威を振るっているにも拘らず、それが丸1年もの間放置されるというのは信じ難いからである⁽²⁸⁾。第二の点に関しては、逆にセルウィウスの方に軍配が上がる。なぜなら、殺されることがわかっていながら、褒賞目当てに自らスケープゴートに志願するなどということとはありえないと思われるからである。

以上のことから、次のような推測が可能となる。すなわち、マッサリアではスケープゴートを用いて罪穢れを祓う儀礼が、古くは疫病に見舞われた時に臨時的に行われていたが、これが次第に予防的行為として定期的に行われるようになり、それにつれて儀礼のクライマックスの形態が、スケープゴートの石打ちによる殺害から(儀式的な石打ちを伴った?)追放へと変化していったのだ、と。原典(ペトロニウス)に依拠しながらも、別の情報源からすでに得ていた知識が邪魔をして両者の内容が混交したのか、あるいは誤った情報を伝える二次資料ないし三次資料から孫引きしたためか、ともかく何らかの事情によって、セルウィウスと「ラクタンティウス」は事実を両者両様に歪められた形で受け取ったのではないか。アブデラにおけるパルマコスの儀礼に関する2つの証言の間の食い違いも、あるいはこれと似たような経緯で生じたものかもしれない。

アテナイにおけるパルマコスの儀礼に関するヘラディオスの証言が、このような推論を助けてくれる。それによると、この浄化儀礼は「疫病を防ぐためのもの」(*λοιμικῶν νόσων ἀποτροπιασμός*)であり、クレタ人アンドロゲオスがアテナイで不法に殺されたため、同市民が疫病に見舞われたという故事にその淵源を持つという。そして同市では、「都市を浄めるにパルマコスをもってするという慣習が常に堅く守り通されていた(*ἐκράτει τὸ ἔθος ἀεὶ καθαίρειν τὴν πόλιν τοῖς φαρμάκοις*)」(*Hellad. ap. Phot. Bibl. 279, 534a Henry*)。ここに我々は、〈災厄(疫病)→スケープゴートを用いた浄め→災厄の予防を目的とした儀礼として定着、年中行事化〉という図式を見て取ることができる。

だが、アンドロゲオスの殺害が原因で発生した疫病を終熄させるための浄化

儀礼は、どのような形で行われたのだろうか。伝説によれば、クレタ王ミノスの子アンドロゲオスは、アテナイ滞在中にパンアテナイア祭の競技会ですべての相手を負かして優勝したため妬みを買って、テーバイへ赴く途中で彼に敗れた者たちの待ち伏せに遭って殺された。一説によると、アイゲウス王が彼をマラトンの牡牛退治に遣わしたところ、逆にこの牡牛に殺されたのだともいう。ミノスはこれに報復するため、艦隊を率いてアテナイを攻めたが、戦が長引いたため、ゼウスに祈って同市に飢饉と疫病をもたらさせた。アテナイ人は神託に従ってヒュアキントスの娘たちを殺したが、これはまったく功を奏さず、結局ミノスの要求に応じて、ミノタウロスの犠牲に捧げるために毎年少年少女を7人ずつ送ることになった⁽²⁹⁾。これをヘラディオスの伝えと結び付けるならば、ヒュアキンティデスの殺害という事件がパルマコスの儀礼の濫觴ということになる。あるいは、これらを安易に関係づけることが許されないとしても、アテナイでかつて疫病その他の災厄が生じた時に、スケープゴートを殺害することによって救われたという伝承が存在し、それがヘラディオス説の背景をなしているということは考えられる。実際、パルマコスが殺害されたと伝える証言の多くが、疫病・飢饉・旱魃などの災厄に見舞われた場合にそれが行われたと述べているのである⁽³⁰⁾。そして、そうした場合のスケープゴートの殺害は石打ちによってなされたとの推測を促す事例が存在する。

プルタルコスの伝えるところによれば、アイニアネス人は大旱魃に見舞われた際、神託に従って王オイノクロスを石打ちによって殺害したという (*Aetia Graeca* 26, 297b-c)⁽³¹⁾。また、ピロストラトス『テュアナのアポロニオス伝』には、次のようなエピソードが見える。疫病が蔓延しているエペソスに請われて赴いたアポロニオスは、全市民を劇場に集め、そこで目に止まった1人のみすぼらしい乞食が魔性のものであることを見抜いて、これに石を投げつけるよう市民らに指示する。彼らは最初は躊躇していたが、乞食の眼に炎が燃えるのを見てこれが悪霊であることを悟り、一斉に石を投げつけ、見る間に石の山が築かれた。石を取り除いてみると乞食の姿は消え、代わりに巨大な犬の死骸が横たわっていた (*Philostr.* VA 4.10)。このエピソードは、エペソスでかつて疫病が発生した際、乞食に代表されるような何がしかのマージナルな存在をスケープゴートに仕立て、これを石打ちによって殺害したという史実を反映するものかもしれない⁽³²⁾。

ヘラディオスはアテナイにおけるパルマコスの扱いを、追放を含意しているようではあるものの、甚だ曖昧な *ἀγελν* という言葉で表現しているが⁽³³⁾、ハル

ポクラティオンは、アテナイのタルゲリア祭においては都市を浄めるために2人のパルマコス「追放した」(ἐξήγγον)とはっきり述べている(Harp. s. v. *Φαρμακός* = Istros, *FGH* 334 F 50)。このことから、アテナイにおいてもまた、災厄に見舞われた場合のパルマコスによる都市の浄めが臨時的措置から定期的に行われる儀礼へと変容してゆく過程で、その形態が石打ちによる殺害から追放へと変化した可能性が考えられるのである。

また、ハルポクラティオンは上述の箇所続けて次のように記している。

ところで、パルマコスというのが個人名であり、この男がアポロンの聖なる杯を盗んでアキレウスの従者らに捕らえられ、石打ちによって殺されたこと、そしてタルゲリア祭において行われることが、この事件を模倣したものであることは、イストロスが『アポロンの顕現』第1巻の中で述べている。

イストロスの伝えているのはイオニアのいずれかの都市におけるパルマコスの儀礼の起源説話であり、アテナイのそれではないということに関して、諸家の見解は一致している⁽³⁴⁾。この未知の都市のタルゲリア祭において行われることは、神聖冒瀆の罪を犯したパルマコスなる男が石打ちの刑に処せられたという事件の「模倣」であるというが、このことが、実際の儀礼の中でパルマコスが石打ちによって殺害されたことを必ずしも意味しないことは言うまでもない。それはパルマコスの追放に際して儀式的な投石が行われたこと、あるいは別の無害な物体(例えば海葱の球根など)が打ち当てられたことを指すと考えてよかろう⁽³⁵⁾。してみると、ここにもまた、〈起源としての石打ちによる殺害→宗教儀礼としての確立に伴う追放という形態への変化〉という図式が認められるのである。

以上の考察から、次のような結論が導かれる。古い時代のギリシアにおいては(少なくともいくつかの都市では)、共同体が疫病・飢饉・旱魃などの災厄に見舞われた時、それが特定の間人による瀆神行為の結果であると考えられる場合はその罪人を、原因不明である場合はスケープゴートを、石打ちによって殺害するという方法で罪穢れを祓い、災いを除去しようとした。そしてそれが次第に災厄を予防し、回避するための儀礼として確立され、年中行事として定着してゆき、その過程で儀礼の中核の形態がスケープゴートの殺害から追放(罪穢れの祓い捨て)へと変化した。それに伴って石打ちは、スケープゴートの追放に際して行われる象徴的・儀式的行為と化した⁽³⁶⁾。

「パルマコスが(石打ちによって)殺された」とする証言は、単なる誤解や混乱

によるものとして直ちに退けられるべきものではない。その背景に、上に提示したような事情が潜んでいる可能性が考えられるからである。

注

(1) 語源については諸説あるが、*φάρμακον* (「薬」) が擬人化されて男性名詞化したものであるとする説が最も有力である。cf. V. Gebhard, s. v. Thargelia(1), *RE* 5A, 1934, 1290; F. Schwenn, *Die Menschenopfer bei den Griechen und Römern*, Gießen 1915, 38-39; M. P. Nilsson, *Geschichte der griechischen Religion*, Bd. 1, München 1967³, 108; O. Masson, *Les fragments du poète Hipponax*, Paris 1962, 113.

(2) 殺害説: O. Höfer, s. v. Pharmakos, in W. H. Roscher(ed.), *Ausführliches Lexikon der griechischen und römischen Mythologie* 3. 2, Leipzig 1897-1909, 2279-2280; A. C. Pearson, s. v. Human Sacrifice, in J. Hastings(ed.), *Encyclopaedia of Religion and Ethics* 6, Edinburgh 1913, 848; J. G. Frazer, *The Golden Bough: A Study in Magic and Religion*, pt. 6, *The Scapegoat*, London 1913³, 253-255; E. Rohde, *Psyche: The Cult of Souls and Belief in Immortality among the Greeks*, tr. W. B. Hillis, London/New York 1925, 321 n. 87 など。非殺害説: L. R. Farnell, *The Cults of the Greek States*, vol. 4, Oxford 1907, 271-272, 276; Schwenn, op. cit., 117; W. J. Woodhouse, s. v. Scapegoat(Greek), in J. Hastings(ed.), *Encyclopaedia of Religion and Ethics* 11, Edinburgh 1920, 219; G. Murray, *The Rise of the Greek Epic*, Oxford 1924³, 13, 317-321; V. Gebhard, *Die Pharmakoi in Ionien und die Sybakchoi in Athen*, Diss. Amberg 1926, 44-48; L. Deubner, *Attische Feste*, Berlin 1932, 179-188; J. Bremmer, Scapegoat Rituals in Ancient Greece, *HSCP* 87, 1983, 315-318; V. J. Rosivach, Execution by Stoning in Athens, *Cl. Ant.* 6, 1987, 248 など。D. D. Hughes, *Human Sacrifice in Ancient Greece*, London/New York 1991, 139-65 は、パルマコス殺害説に立つ論者らが論拠としている資料に逐一検討を加え、それらの信憑性を否定している。

(3) R. Hirzel, Die Strafe der Steinigung, *Abhandlungen der Philologisch-Historischen Klasse der Königlich Sächsischen Gesellschaft der Wissenschaften* 27, 1909, 244; J. E. Harrison, *Prolegomena to the Study of Greek Religion*, Cambridge 1922³, 102-105; Nilsson(1967), 109.

(4) ヒッポナクスのテキストは M. L. West(ed.), *Iambi et elegi Graeci ante Alexandrum cantati*, vol. 1, Oxford 1989² に従った。

(5) Cf. Hesych. s. vv. *κραδησίτης* (=Hippon. fr. 152 West: *φαρμακός, ὁ ταῖς κράδαις βαλλόμενος*), *κραδίης νόμος* (=Hippon. fr. 153 West: *...φαρμακοῖς, κράδαις καὶ θρίοις ἐπιραβδιζόμενοις*). fr. 10 と fr. 92. 3-4 からはパルマコスが性器を打擲されたことが窺えるが, Bremmer, op. cit., 301 は, これは詩人の「悪意に満ちた想像力の産物」であろうと考えている。イチジクの木と海葱が用いられることについてもさまざまな説明が試みられているが, 後者に浄めや厄除けの効力があると信じられていたことが Diphilus fr. 125 K-A; Theocr. 5. 121, 7. 107; Theophr. *Char.* 16. 14; Dio Chrys. 48. 17 などから知られる。海葱については J. Scarborough, *The Pharmacology of Sacred Plants, Herbs, and Roots*, in C. A. Faraone and D. Obbink(edd.), *Magika Hiera: Ancient Greek Magic and Religion*, New York/Oxford 1991, 146-147; R. Parker, *Miasma: Pollution and Purification in Early*

Greek Religion, Oxford 1983, 231-232, 258 n. 8 を参照。Bremmer, op. cit., 308-313 は、これらの植物は arbor infelix であり、それゆえマージナルな存在であるパルマコスに対して用いられたのだと説く。

(6) テキストは P. A. M. Leone(ed.), *Ioannis Tzetzae Historiae*, Napoli 1968 に従った。

(7) *Chil.* 8. 906-908; Schol. Ar. *Plut.* 454b; Schol. Ar. *Ran.* 733a. ただし、これらの箇所では灰は市中に、あるいは辺り一帯に撒かれたとされている。

(8) Hughes, op. cit., 143. *φαρμακός* と *κάθαρμα* が同一視されている例は, Tzetz. *Chil.* 5. 728, 8. 905, 909, 13. 333-334; id. Schol. Ar. *Plut.* 454b; id. Schol. Ar. *Ran.* 733a-b; Schol. Ar. *Ran.* 730; Schol. Ar. *Plut.* 454; Schol. Ar. *Eq.* 1136c; Suda s. vv. *κάθαρμα*, *φαρμακός*, *πονηρός* (2040) など。

(9) O. Masson, Sur un papyrus contenant des fragments d'Hipponax (P. Oxy. XVIII. 2176), *REG* 62, 1949, 312-314, 317; id. (1962), 169 など。

(10) Frr. 85. 8, 193. 13 Pfeiffer.

(11) Hughes, op. cit., 145. Rosivach, op. cit., 236 n. 14 も同一見解。

(12) *LSJ Suppl.* s. v. *ψηφίς* I 1.

(13) Cf. *Dieg.* II. 37-40 ad Callim. fr. 90 Pfeiffer (後述)。

(14) A. S. Pease, Notes on Stoning among the Greeks and Romans, *TAPA* 38, 1907, 6; I. Barkan, *Capital Punishment in Ancient Athens*, diss. Chicago 1936, 41; Hirzel, op. cit., 239.

(15) Apollod. *Epit.* 3. 8, 6. 8; Schol. Eur. *Or.* 432; Philostr. *Her.* 311.

(16) Hdt. 9. 5; Dem. 18. 204; Thuc. 5. 60. 6; Paus. 4. 22. 7, etc.

(17) これはギリシア文学に繰り返し現れるモチーフである。e. g. *Il.* 16. 384-392; Hes. *Op.* 240-247; id. fr. 30. 15-19; Pind. *Pyth.* 3. 35-37; Aesch. *Sept.* 597-608; Pl. *Leg.* 910b; Philostr. *VA* 8. 5.

(18) *Il.* 3. 56-57.

(19) Cf. *Il.* 13. 622-627; Aesch. *Ag.* 699-708.

(20) T. W. Allen(ed.), *Homeri Opera*, vol. 5, Oxford 1912, 108. cf. Alc. fr. 298 Campbell; Paus. 10. 31. 2.

(21) *Od.* 5. 108-109.

(22) *Il.* 1. 9-52.

(23) Parker, op. cit., 267.

(24) *Il.* 1. 313-314.

(25) Hirzel, op. cit., 244; K. Latte, s. v. Steinigung, *RE* 3A, 1929, 2295; H. Lloyd-Jones, The Cologne Fragment of Alcaeus, *GRBS* 9, 1968, 136.

(26) なぜ頭を狙うのかについては, T. J. Saunders, *Plato's Penal Code: Tradition, Controversy, and Reform in Greek Penology*, Oxford 1991, 242 n. 136 を参照。

(27) Hughes, op. cit., 157.

(28) M. P. Nilsson, *Griechische Feste von religiöser Bedeutung*, Leipzig 1906, 109; Farnell, op. cit., 279; Deubner, op. cit., 186-187; Hughes, op. cit., 159.

(29) Apollod. 3. 15. 7-8.

(30) Tzetz. *Chil.* 5. 729-730, 8. 907; id. Schol. Ar. *Plut.* 454b; Schol. Ar. *Eq.* 1136c; Schol. Ar. *Ran.* 730; Schol. Ar. *Plut.* 454. cf. Schol. Aesch. *Sept.* 680.

(31) 神話においてはスケープゴートたるべき存在が王侯貴族であるのに対し、現実におけるそれは「屑」である。このコントラストについては Bremmer, op. cit., 304

-307を参照。

(32) W. Burkert, *Structure and History in Greek Mythology and Ritual*, Berkeley 1979, 70は、そのように考える。

(33) Cf. Hippon. fr. 10 West: ...ἐν δὲ τῷ θύμῳ φαρμακὸς ἀχθεῖς ἐπτάκις ῥαπισθείη.

(34) Farnell, op. cit., 281; Gebhard(1926), 17-18; id.(1934), 1294; Deubner, op. cit., 181; Parker, op. cit., 259 n. 11; Hughes, op. cit., 153. ibid., 246 n. 53は、カリマコスの弟子であったイストロスが自著の中で、アブデラのタルゲリア祭について書いたのではないかと考えている。

(35) Hughes, op. cit., 153-154.

(36) この儀礼は、少なくともいくつかの都市においては、その形態がスケープゴートの追放へと変化した後も、年中行事としてのみならず、疫病その他の災厄が発生した場合の臨時的措置としても行われたと考えるのが妥当であるかもしれない。cf. Nilsson(1906), 106; Bremmer, op. cit., 301.